

香川大学生の進路意識と未来観

高 津 義 典 (理 事)

1. はじめに

「地域活性化」の必要性がいわれるが、香川大学生は地域の発展にどのような関心をもつのであろうか。「ベンチャー起業」が叫ばれるが、彼らはそうした事業への関与にどの程度の現実感を持っているのであろうか。

これらを知るため私は、学生諸君に対し様々の機会にアンケート調査を行ってきた。調査の分野は次第に拡大し、彼らの将来設計や社会・文明観など多岐にわたるものとなった。この中から本稿では、香川大学生の進路意識と未来観を中心として興味深いと思われる点を順次紹介しつつ分析を加える。

香川大学という地方の大学に進学し在籍している学生諸君が、自らの将来についてどういう考えを持っているかは、法人化した大学のあり方を考える上で重要な資料となるであろう。また現在、東京への一極集中が進み地域格差が拡大しているなかで、地域活性化に貢献する人材を得ることにおいて、大きな示唆を得るであろう。

2. 調査方法等

私が担当する教養教育の授業（各学部にわたり1年生が中心）、工学部および工学研究科の授業（学部2，3年生および大学院生）などにおいて、講義内容との関連で時宜に応じてアンケート調査を実施し学生らの議論に供してきた。本稿はそれらを素材としている。

本稿に採用したアンケートの結果図表について、その実施要領を概括すると表1のとおりである。実施時期は2003～2004年。学生に対するものは、授業のさなかに行ったので回答数は時々出席していた学生数に一致する。集計の態様は各図にみるとおり、文系理系別（文系＝教育・法学・経済の各学部、理系＝工学・農学・医学の各学部とした）、出身県別、大学院生・学部生の別などとしているが、調査項目ごとに有意な結果が得られるものを採用した。

表1 アンケート実施要領

図の番号	摘要	調査した機会	調査時期	回答者数
1~2	文系学生	教養教育授業	2003	60
	理系学生	"	"	171
3~6	香川県出身学生	教養教育授業	2003	74
	岡山県出身学生	"	"	57
	他地域出身学生	"	"	99
7	大学院生	工学研究科授業	2004	62
	学部生	工学部専門授業	"	120
8~11	文系学生	教養教育授業	2003&2004	68
	理系学生	"	"	174
12~14	香川大学生	教養教育授業	2004	193
	町の文化協会	琴平町でのセミナー	"	29

3. 学生らの地域との関わり

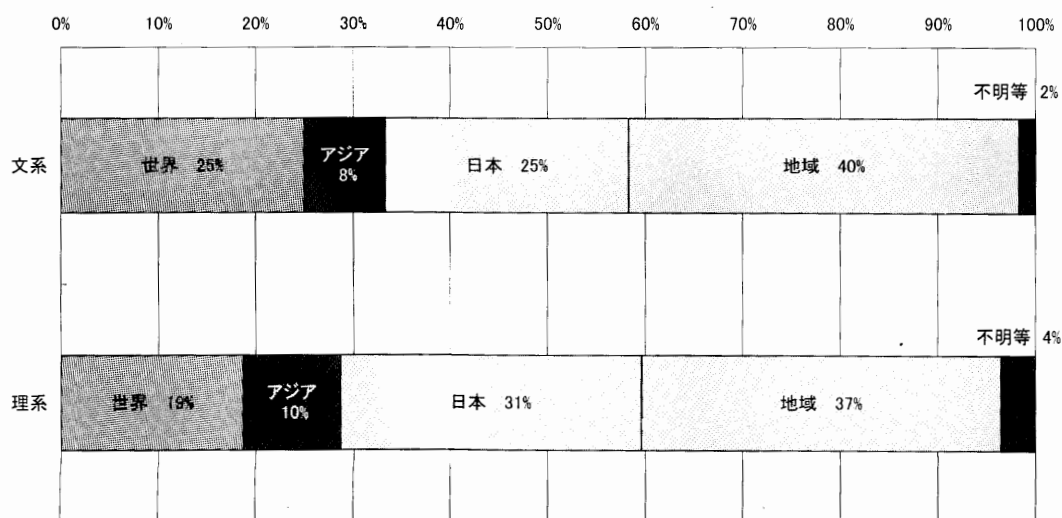
3. 1 地域の発展を考えているか

香川大学生に地域活性化の役割を期待しうるのであろうか。

学生諸君に、将来において「あなたが発展に寄与したい（地理的）領域はどれか」を聞いたところ、結果が図1である。

ほぼ4割の学生が「地域」を念頭において活躍したいと答え、このウエイトがもっとも大きい。地域活性化の観点からは大いに心強いことである。次いで「日本」を視野とするものが25~30%。これに「世界」が続くが、文系の学生に相対的に多い。現今の政治経済情勢に関しては、とくに地理的に広い視野を持って考えざるをえないことによるであろう。

図1 あなたが発展に寄与したい領域はどれか



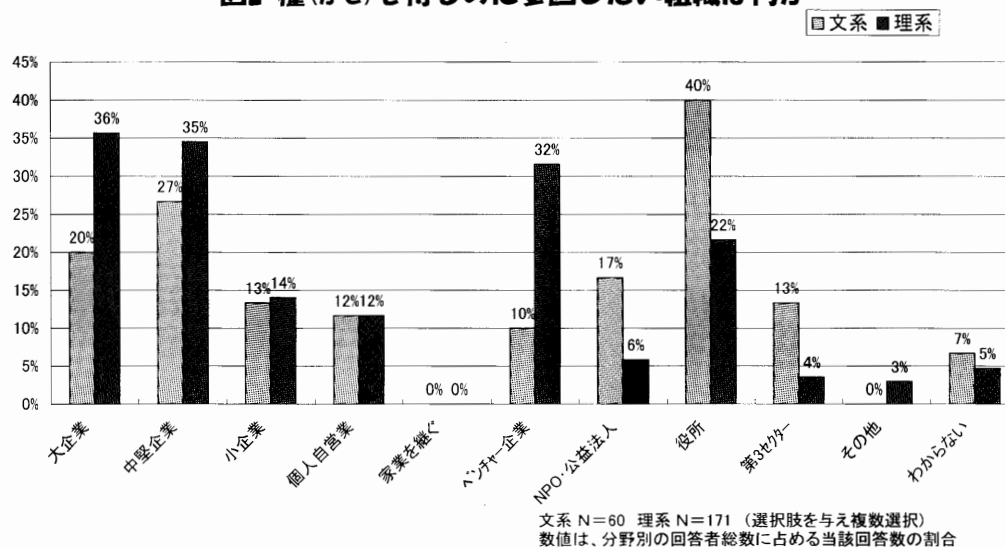
文系 N=60 理系 N=171 (選択肢を与え1項選択)

学生らにとって「地域」がもっとも強く意識されていることについては、就職希望先を尋ねた「(日々)の糧(かて)を得るのに参画したい組織は何か」の調査からも裏づけられる。図2が結果である。(〈複数回答可〉)として聞いているので、各項目の回答率の合計は100%を超える。以下〈複数回答可〉の場合と同じ)

大企業(日本全体を視野において活動することを予期させる)への希望も多いが、案外に中堅企業への希望が多く、大企業志望に比肩するか、むしろそれを上回る。これとほぼ同程度に役所への希望も多い。学生らの公務員試験への応募動向からして地方公務員ないし第Ⅱ種国家公務員(地方支分部局の幹部要員である)を目指すものである。このほか、理系ではベンチャー企業、文系ではNPO・公益法人を希望する者が目立ち、最近の社会情勢を反映している。

学生諸君らは大手指向や就社思考に必ずしもとらわれていないと察せられる。終身雇用制が事実上崩壊している現実などを受けて、多様に就職先を模索している。その中で香川大学生は将来に活躍する場として「まず地域」を意識していることが浮かび上がる。

図2 糧(かて)を得るのに参画したい組織は何か



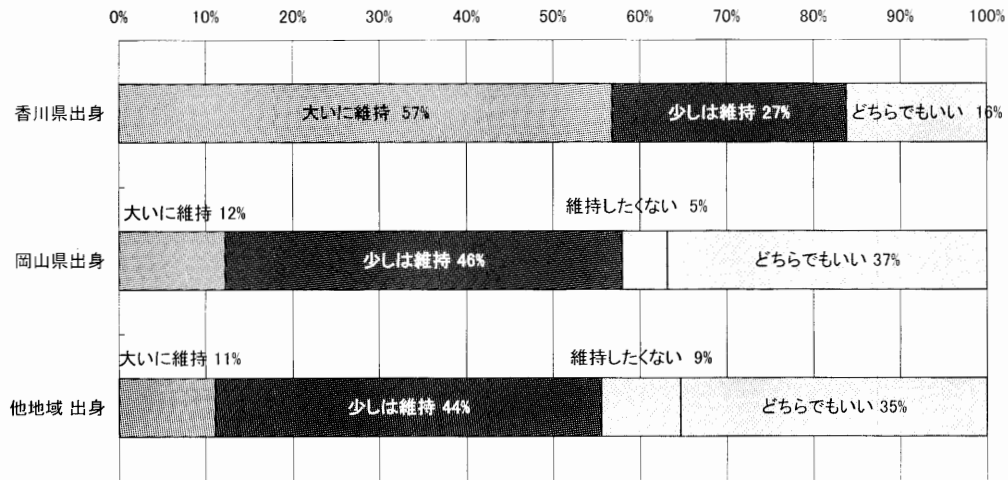
3. 2 香川県とのかかわり

いったい、その地域として、どの地方が念頭にあるのかが次の問題である。

本学入学者の出身地(卒業した高校の所在地)を地域別にみると、最近では香川県出身者と岡山県出身者が、ともに3割弱で拮抗している。残りの4割強はその他の都道府県の出身者で、四国内の出身が多いものの、全国各地の広がりを見せ、北は北海道から南は沖縄県に至る。ここでは出身地域を「香川県出身」、「岡山県出身」とこれに含まれない「他地域出身」の3つに分けて集計する。

香川県以外の出身者にとって、香川県がどう意識されているかをまず考えてみよう。「卒業後、香川県との関係を維持したいか」について聞いた結果は、図3のとおりである。

図3 卒業後、香川県との関係を維持したいか



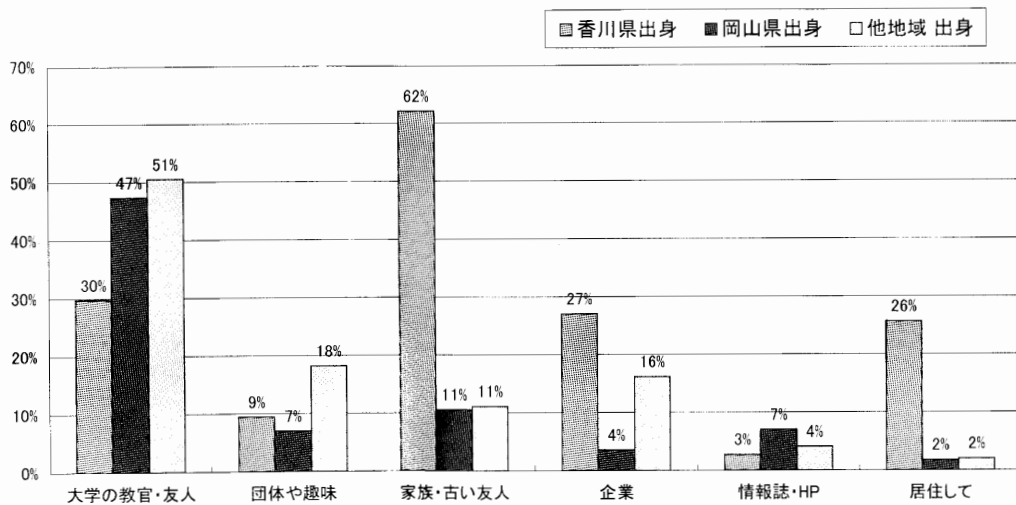
香川県出身 N=74 岡山県出身 N=57 他地域出身 N=99 (選択肢を与え1項選択)

岡山県出身の学生と他地域出身の学生は、ほぼ同様の傾向をしめしている。「大いに維持する」と「少しは維持する」をあわせると過半のものが何らかの形で香川県との関係を維持したいと考えている。そのほかでは「どちらでもいい」との回答が3分の1をしめ、卒業後も香川県との関係を維持することに決して否定的ではない。

「卒業後、香川県との関係を維持する方法は何か」〈複数回答可〉について聞いたところ、図4のとおりである。

香川県出身以外の学生については「大学の教官・友人」を通じて、とするものが回答者のほぼ半数を占める。香川県との関係を引き続き維持させるには大学の役割が大きいことが窺える。

図4 卒業後、香川県との関係を維持する方法は何か



香川県出身 N=74 岡山県出身 N=57 他地域出身 N=99 (選択肢を与え複数選択)
数値は、分野別の回答者総数に占める当該回答数の割合

一方、香川県出身者についてみると、図3から香川県と「大いに関係を維持したい」が過半を占め

る。図4から関係を維持する手段としては「家族・古い友人」のほか、「大学の教官・友人」、「企業」、「居住して」などと多様である。

香川県出身者にとっての「地域」は、とうぜん香川県が圧倒的であり、郷土への愛着心ないし依存心が強い。

3. 3 香川大学とのかかわり

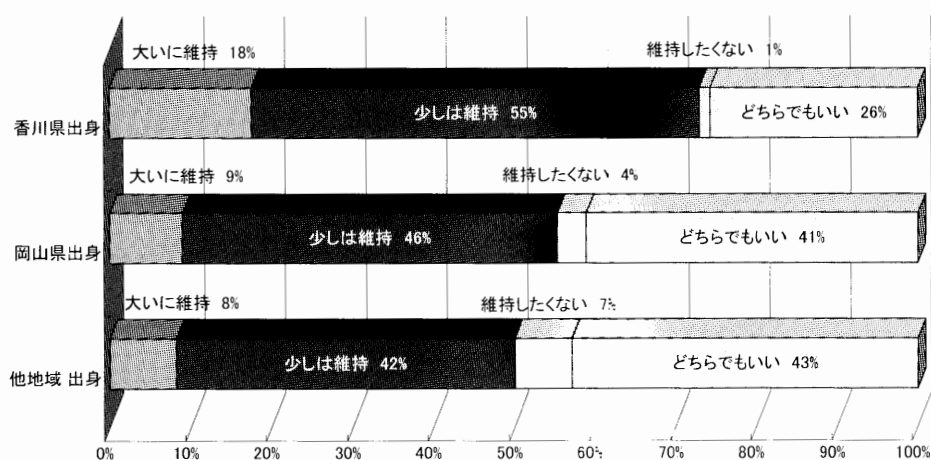
ついで香川大学とのかかわりについて聞いた。

「卒業後、香川大学との関係を維持したいか」についての答えは、図5のとおりである。また「卒業後、香川大学との関係を維持する方法は何か」〈複数回答可〉の結果は、図6のとおりである。

図5と先の図3とを対比すると、香川県に比べて香川大学については「関係を維持したい」とする動因が相対的に弱い。大学が県の構成要素のひとつである以上、当然の帰結であろう。

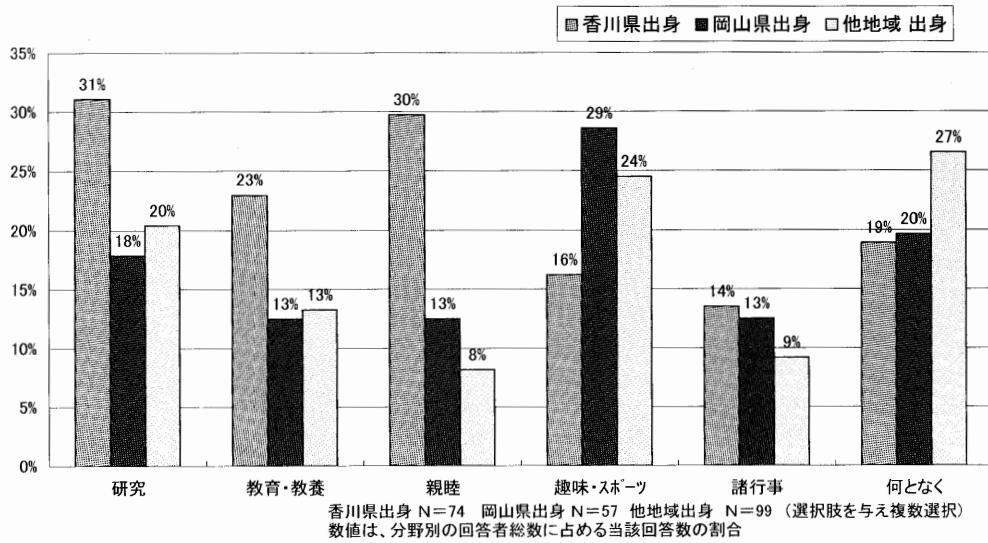
他県出身者についても香川大学との関係を維持することに後ろ向きではない。関係を維持する方法については「何となく」とする声もかなりあるが、「趣味・スポーツ」や「研究」などの分野で維持したいとの意欲が覗く。

図5 卒業後、香川大学との関係を維持したいか



香川県出身 N=74 岡山県出身 N=57 他地域出身 N=99 (選択肢を与え1項選択)

図6 卒業後、香川大学との関係を維持する方法は何か



ここでも大学の役割は大きい。クラブ活動やゼミナール研究などを通じて学生との関係を築き、卒業後もそれを維持する仕組みをより強くしていく必要がある。

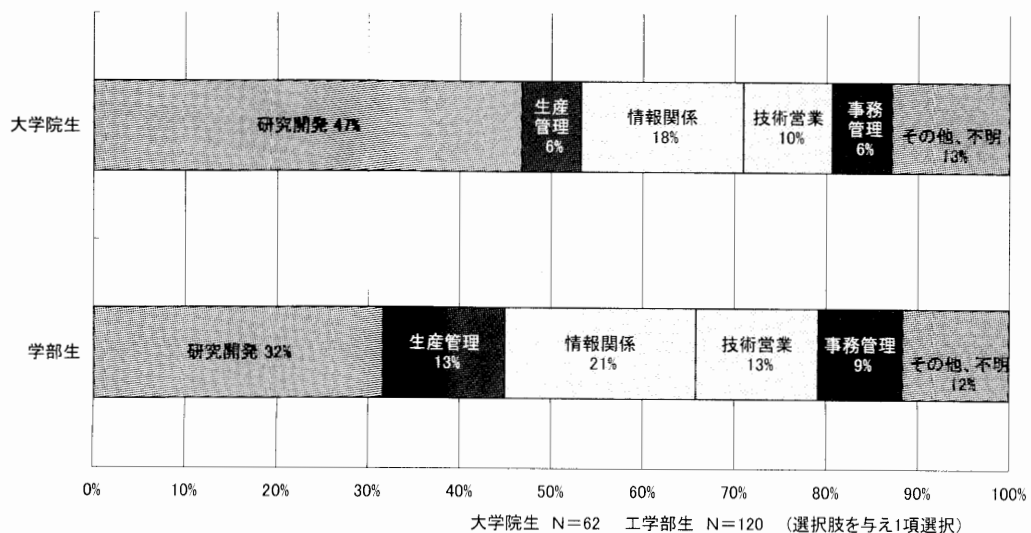
一方、香川県出身者については、先の図4と合わせ考えると、香川の企業に就職し、香川に住んで家族や友人と関係を持ち、香川大学とは研究・親睦・教育・教養などの各般を通じて濃密な関係を築き上げたいとの希望が窺える。

こうした期待に十分応えうるかどうか、本学に対する地元の人気や評価を左右するであろう。地域と大学と、双方の展開にとって我々構成員への期待は大きいといわざるを得ない。

3. 4 工学部生等の活躍したい場面

本章3. に関連したことで、本学の工学関係の大学院生と学部生に対し「あなたが働きたい分野はどれか」を聞いた結果があるので、図7に掲げておく。

図7 あなたが働きたい分野はどれか



「研究開発」に従事したいとの希望がもっとも多く、大学院生ではほぼ半数にも達する。次いでは「情報関係」が多い。今日、地域活性化のためには産業技術の革新や情報産業の振興への期待が大きいところであり、心強い結果である。問題は、大学が企業の要求に応えうる人材を育成できているか、また地元企業が卒業生らを評価してくれるかであろう。

「技術営業」および「事務管理」と答えた者は、理系に進んだもののやや不適應を感じているとも受け取れるが、その比率は決して大きくない。理系に進んだ学生の太宗が、進学先に満足して将来設計を考えているらしいことは（ここでは紹介しないが）ほかの調査項目からも窺えた。

4. 学生らの起業意識

「ベンチャー」が喧伝される今日、既成の企業に就職するのではなく、自ら起業することに本学の学生がどういう意識を持っているであろうか。

本章4. に関する調査では回答を文系理系別に集計すると有意な結果が得られた。本学の6学部を文系理系にどう割り振るかは、冒頭にしめしたとおり、教育・法学・経済の各学部を文系、工学・農学・医学の各学部を理系とした。

4. 1 起業に取り組みたいか

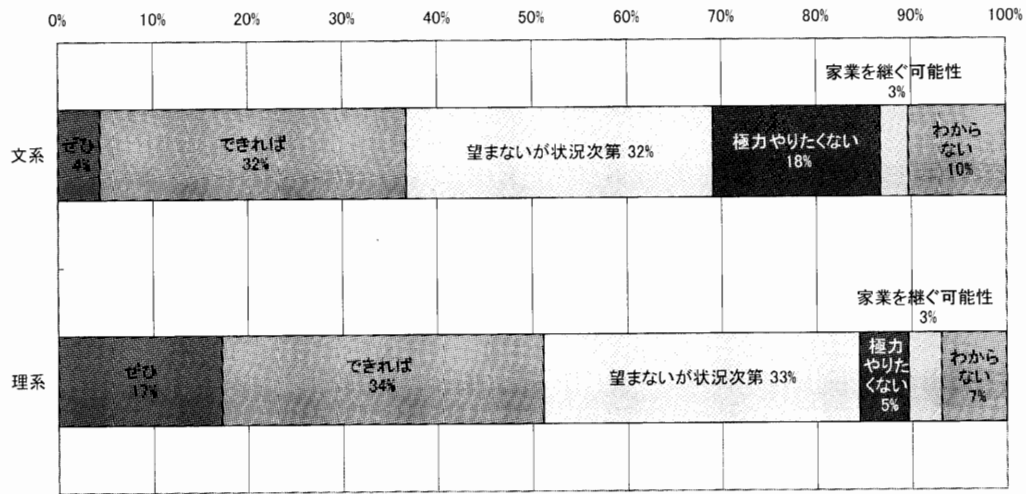
「あなたは生涯のうちに起業に取り組みたいか」の問いに対する学生らの回答は図8のとおりである。

「できれば」とか「望まないが」とか、気迷いをしめす修飾語を冠した項目への回答が多い。起業はすべてが成功しうるものではないし、始めたら後戻りもむずかしい。相応のきっかけと決断を要することであるから、当然であろう。

その中で理系学生の起業意識が相当に高いのが注目される。「起業したい」について「ぜひ」と「できれば」を合わせると理系学生では過半に達する。近時の起業教育の成果であろう。既存企業を取り巻く情勢が厳しいと受け止められているからでもであろう。

起業や研究開発に関する成功譚が、日々報じられる。技術開発に取り組む以上、何らかの新技术や新商品・新サービスを擁して市場に打って出たい。そういう若者の熱気が伝わってくる。まさに時代に触発されたもので、いまの中高年世代からは「ひと昔前に我々が考えていた状況とは大きいに違う」と感心する声をよく耳にする。

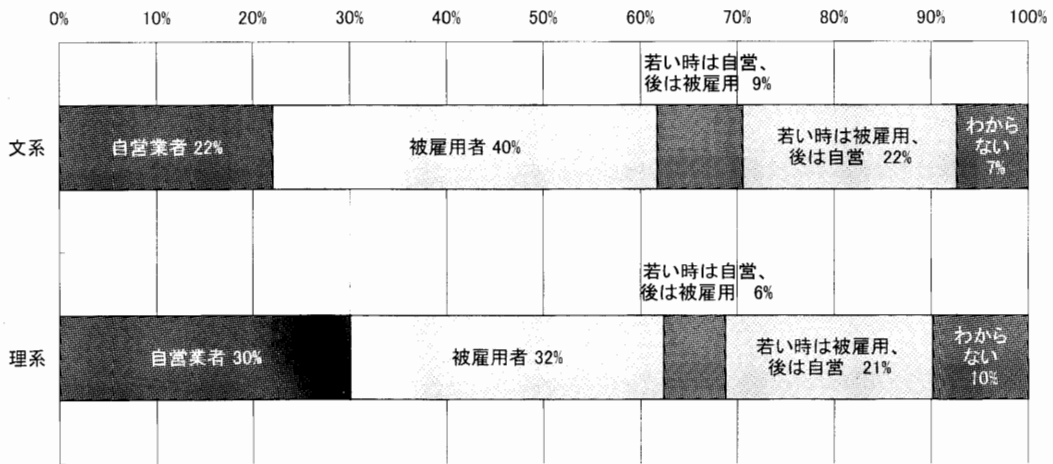
図8 あなたは生涯のうちに起業に取り組みたいか



文系 N= 68 理系 N=174 (選択肢を与え1項選択)

「起業」つまり自営の事業に取り組む意欲を「被雇用」の立場との比較や「年代」との関係において、さらにくわしく聞いてみた。「仕事の種類と所得は同じ」という前提で、自営と被雇用のどちらを選ぶかを種々の選択肢をあげて聞くと図9のようになった。

図9 同じ仕事で同所得のとき、自営と被雇用のどちらを選ぶか



文系 N= 68 理系 N=174 (選択肢を与え1項選択)

「(そもそも) 自営業者を選ぶ」と「若い時は(とくに) 自営を選ぶ」とを合わせると、理系でも文系でも3割を超える。

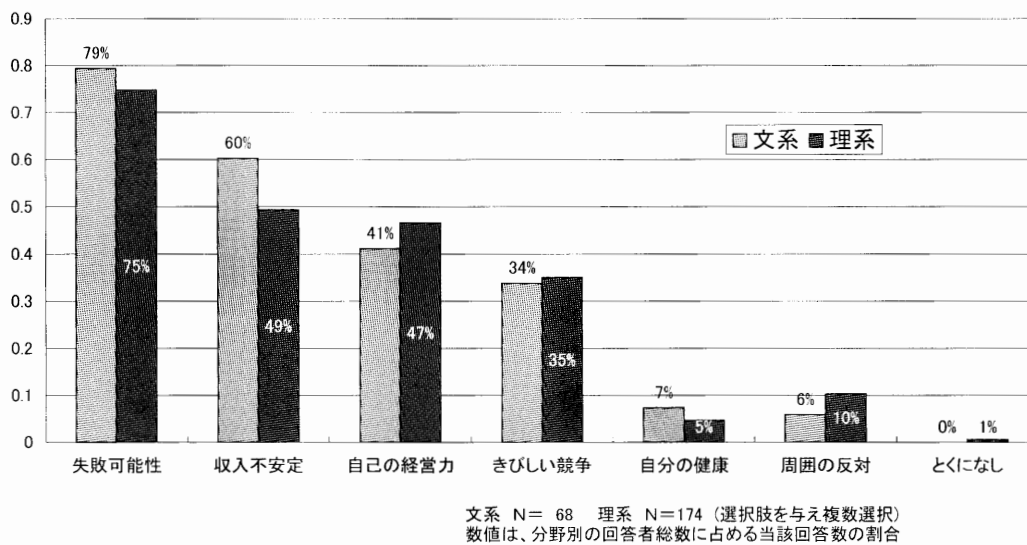
このほかに「若い時は被雇用だが、後には自営を選ぶ」が文理ともに2割強ある。いまだ経験の乏しい学生が、社会や市場のようすをまず実地に経験しておきたいとするのは健全かつ妥当な考えである。これを加えると、生涯において何らかの形で自営業者を選ぶと表明する学生は、合計して過半を超える。

彼らのチャレンジングな精神に大いに敬意を表したいところである。しかしこれは単に大きな組織への参画を忌避したいという気持ちの現れにすぎないのではないか、の疑念をぬぐい得ない。そこで彼らの起業意識が、どのような現実認識を踏まえたものであるかを次に探る。

4. 2 起業環境の認識

学生らがベンチャー企業をめぐる実業界のようすをどうとらえているかを知るため「起業に不安を感じる要素は何か」〈複数回答可〉を聞いた。結果は、図10のとおりである。

図10 起業に不安を感じる要素は何か



「失敗可能性」への不安が4分の3を超える者によって指摘された。次いでは「収入不安定」、「自己の経営力」、「きびしい競争」などへの不安が、この順に続く。「周囲の反対」が少ないのは、起業がすでに我が国の社会に根づいている証左であろう。

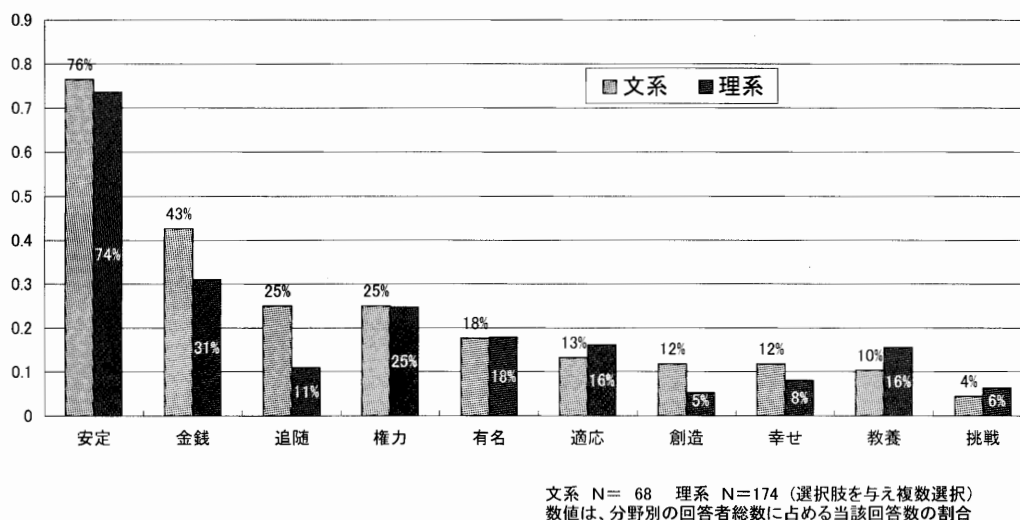
自由主義経済のもとでは起業は原則として自由であり、富や名声に通じる夢多きものである。しかしその一方で、事業者間における競争は避け得ない。競争の厳しさの程度は時代や業種により異なるが、ベンチャー企業や小企業は事業基盤が小さいだけにリスクへの対応力に欠けることを払拭できない。

そうした認識を踏まえた上で学生らの起業意識はかなり高いのである。したがって彼らは経済社会の実態をさまざまに見聞しながらも、リスクを承知で起業に取り組みざるを得ない今日的情況を理解しているようだ。

同様のことは「現在、日本の社会指向で強いものは何か」〈複数回答可〉に対する回答結果である図11からも推察される。

学生らの起業意識はかなり高いのであるから、日本の社会指向として「有名」「創造」「挑戦」などを想定しているのではないかと予想していた。しかし突に相違した。「安定」指向と答えた者のウェイトが圧倒的に高く、回答者のほぼ4分の3がそう答えた。それが文系理系の別を問わない。「金銭」「権力」などがこれに次ぐ。

図11 現在、日本の社会指向で強いものは何か



「社会は安定志向でも、自分はそういうわけにもいきまい」とする将来への危機意識が起業意欲を高めているのか、あるいは若者らしい挑戦的な姿勢がそう答えさせているのか。ゼミナールでの議論に供してみたが、明確な方向性は得られなかった。社会指向に関する意識と自らの起業意欲とは、結びついていないようであった。

5. 社会観、文明観

最後に、いったい香川大学生は日本の将来について、どういう見通しを持っているのか。

集計結果について絶対的な評価をくだしにくい設問であるから、本章5. では「大学生」の回答結果と「ある町の文化協会」の会合におけるアンケート結果とを対比しながら分析する。後者での出席者は9割が50歳以上であったから、世代による考え方の違いを浮き彫りにできるであろう。

5. 1 日本の文化的伝統や価値

日本の将来を考えると、何よりも世界での「共存」のあり方に思いをめぐらせざるを得ない。いったい日本の将来は明るいのか、世界の中で名誉ある地位を占めうるのか。

これまでの世界文明の流れに照らして具体的に問えば、日本の有している価値や文化の中で「世界に広がるものないし積極的に広げるべきもの」があるかどうか、あるとすればそれは何か。

図12の縦軸に「日本の文化や価値」で優れているとされる項目をあげ、それぞれ重視すべきと考える程度に応じて〔大変重視=5、かなり重視=4、ふつう=3、あまり重視しない=2、まったく重視しない=1〕という5段階の評価付けをしてもらった。つまり各項目に5～1の評価値を記入してもらった。

図12は香川大学生と「ある町の文化協会」のセミナー出席者とから、別々の機会に回答を得た結果である。各項目に対する評価値について集計グループごとの単純平均値をしめしたもので、横軸の3.

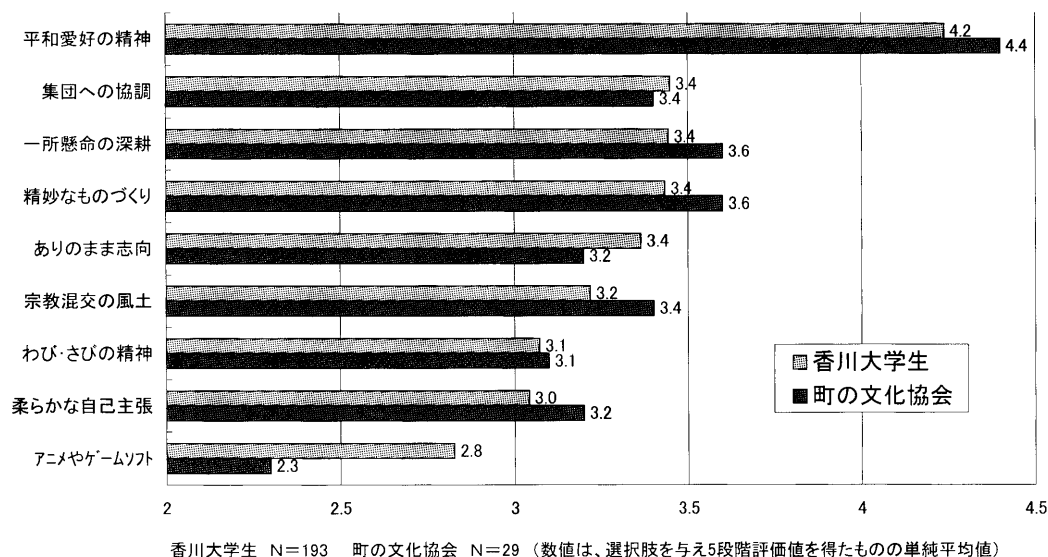
0の目盛りに当たるところが平均すると「ふつう」と評価されたことを表わす。それより高い値をしめすものほど、より重視すべき項目と評価されたことになる。

「平和愛好の精神」が学生と文化協会とにおいて高く評価されており、評価値平均がともに4.0をかなり上回る。世界平和の伝道者たるべき日本の立場を重視すべきであると考えている。過去の戦争を強く実感している中高齢者の方が高いのは当然といえる。しかしこれは日本の軽武装を前提にするであろうから、軍事力がなお幅を利かせている現代の国際社会において現実的に浸透可能であろうか。「平和」が高い評点を得たのは、他から文句をつけがたい項目として消極的に選ばれたという側面も否定できないであろう。

次いでは「集団協調」、「一所懸命」、「ものづくり」など、従来から勤労面における日本人の優れた資質とされてきた項目が一同として並ぶ。いずれも圧倒的に高い評価というわけではないが、現実的な日本のパワーとして明確に認識されている。

次いでは「ありのまま志向」、「宗教混交の風土」、「わび・さび」、「やわらかな自己主張」など、欧米流ないし一神教的な考え方に相反する資質が並ぶ。つまり近代思想へのアンチテーゼとされるものが一群となっている。これらの重要性は理解できるが、果たして世界を改変しうる現実的な力になりうるのだろうか。今後の道程において相当の曲折があり、日本人の智慧や資質が問われるであろう。実現への筋書きを具体的に描ききれないなどのため、これらを肯定的に評価しながらも評価値は抑制気味になっていると推察される。

図12 世界に広がる(広げる)べき日本の文化や価値



学生らの評価と文化協会でのそれとを比較すると、総じて学生らの評価値の水準が低い。つまり「日本の良さ」に対する評価が、中高齢者より若者の方が弱く消極的である。学生らの方がより高い評価をくだしているものに「集団協調」、「ありのまま志向」があるが、いずれも積極性に乏しい印象の項目である。

その理由を学生らに問うたところ「日本の将来への不安」、「日本は力を失いつつある」、「若者はい

まだ日本の価値を知らない」、「日本の背負っているものが大きすぎる」などの答えが返ってきた。

学生らの評価値が高いとして目立つものは「アニメやゲームソフトにおける日本の優位」があるのみ。

いまの若者らの力によって、技術・経済・文化などの面で国際的な成果を数多く生み出し、世界における自信を高めてほしいものである。

5. 2 日本は世界の文明中心となるか

若者らの相対的な自信のなさは「日本が世界の文明中心になるか」に関する問いでも明らかになる。

これまでの世界文明史における日本の位置を概括すると、古くは中国文明の、近代に至っては西欧文明の、追従的立場に甘んずる場面が多かった。このため日本が世界の文明中心として積極的に振舞う機会は少なかった。しかし今日、日本は世界に誇る経済技術大国となった。これから我が国は世界の中で自分をどう位置づけ、どう振舞うべきであろうか。

図13は将来において「日本が（世界の）文明中心になる可能性があるか」について聞いた結果である。

学生らの回答を文化協会のそれと比べると、可能性が「大いにある」とする項目ではより積極的ながら、総じてみると否定的な傾向が強い。若い世代の方が「日本に対する自信」がより薄弱なのである。

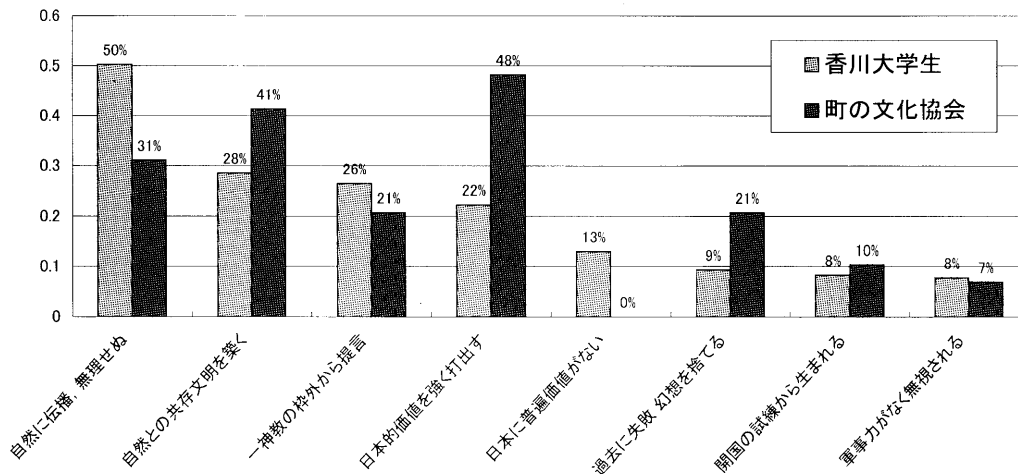
図13 日本が文明中心になる可能性



香川大学生 N=193 町の文化協会 N=29 (選択肢を与え1項選択)

次いで図14は「日本が（世界の）文明中心になることに関する意見」〈複数回答可〉を聞いたものである。

図14 日本が文明中心になることに関する意見



香川大学生 N=193 町の文化協会 N=29 (選択肢を与え複数選択)
 数値は、分野別の回答者総数に占める当該回答数の割合

学生らの回答では、日本の価値が優れたものであれば「自然に伝播するから無理しない」とする回答が半数に達する。これに対し文化協会の方では「日本的な価値を強く打ち出す」との意見がほぼ半数に達し、対照的である。「日本には普遍的な価値がない」とする消極的項目についても、学生らでは10数%あるが、文化協会ではまったくみられない。

敗戦の現実をより濃厚に見聞したはずの中高齢者の方が、なお「世界の中の日本」という図式を、より積極的に支持している。これは従来からの思考パターンを引きずっているからなのか、あるいは経済大国になりえたなどの成功体験がしからしめているのか。その一方で、学生らの方が消極的であるのは、豊かに育ったせい、目標を喪失しがちな現代の風潮のためか、いまだ知識や経験が浅いゆえであるか。もっとも「過去に失敗したから幻想を捨てる」とする回答も中高齢者の方が多い。

世界の大きな流れを踏まえた歴史教育、文明教育が必要なときであろう。

6. おわりに

「世界に雄飛する日本」というイメージにおいて、学生諸君の考え方は中高齢者に比して消極的であるが、一方で、地域への貢献とかベンチャー起業については積極的である。

若者らの力によって地域や産業が活性化され、多様で独自性のある価値を生み出していけば、改めて日本の価値が再認識され将来への展望が開けるといふシナリオがありうる。これに応えるべき地方大学の役割は、従来にも増してさらに重要と銘記される。